

2013年8月11日「昨日まで見えなかったこと」マタイ6：25－34

今日の話はイエス様のたとえ話。有名なところ。説明しなくても分かると思う。たとえ話というのは本来解き明かしが必要ない。だってイエス様の解き明かしそのものだから。誰が聞いてもイメージ豊かに、そして面白く理解することができるように、イエス様はいつもユーモアたっぷりのたとえ話をされる。今日はこのイエス様のお話から、「昨日まで見えなかったこと」という題でお話させていただく。大事なことのいっぱい含まれている箇所だが、「見る」ということに的をしぼって解き明かしさせていただく。

「25「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」

何を食べようか、何を着ようか、そんなこと思ひ悩むな。そして、命は食べ物よりも大切、体は衣服よりも大切と言われる、これは考えてみると滅茶苦茶な物言いですね。そりゃそうです、誰でもそんなこと知ってる。この当時、このイエス様の周りに集まった人々というのは、非常に重い税金を課されてみんな本当に苦しいわけです。私たちのような飽食の時代じゃない。本当に腹が減ってしかたないのですね。それはイエス様も同じ。食べるにことかくような生活を送っておられたと思う。でもそういうことを明るく笑い飛ばすようにして、イエス様は言われる。「がばいばあちゃん」というお話で、おなかが減ったと訴えると、ばあちゃんに「はははは、気のせいや」と笑い飛ばされた。そうすると、そうか気のせいかと思った、なんて話があるのですが、豪快さという意味ではイエス様も負けず劣らず。

「命は食べ物より大切であり、体は衣服よりも大切ではないか」。めちゃくちゃな理屈です。論理のすり替えと言われればそれまでです。でもイエス様は、ここで論争しているわけではありません。イエス様は、ただこの周りに集まった人々を元気づけたいだけなのです。彼らを包んでいる神の愛に気付かせたいだけなのです。だからめちゃくちゃでも何でもかまいません。こういうインパクトのある言葉でなければ、私たちは目を覚まさない。目を覚まさせて、教えようとしていてくださいます。あなたには食べ物にまさる命がすでに与えられている、着物にまさる体がすでに与えられている。それを与えてくださった神がおられる。あなたを愛しておられる神が生きておられる。そうやって、打ちひしがれている人々の心を光のほうにひらいていくのです。

そして空の鳥を見なさい、と言われる。「見る」が出てくるわけです。あの鳥を創られたのはどなただ、生かしておられるのはどなただ、聖書には、それは父なる神だと書いてある。じゃあ、あなたたちは、どうなんですか。あなたは鳥よりも価値があるでしょう。野の花を見なさい、神が装っておられるじゃないか。あなたは野の花よりも、価値あるものではないか。そん

なあなたを神が悪いようになさるはずがないと、心を大きく開いてくださる。

自分は鳥よりも価値がない、花よりも価値がないなんて思われる方もいるかもしれませんが。でも少なくとも聖書にはそうは書いてありません。私たちは神の似姿につくられた、神との特別な交わりに招かれている価値ある人間です。大胆に言いますと、神は互いに愛し合うために人間を創造されたとも言える。だから神の前で、鳥より価値があるとされている。神がつくられたすべてのよきものの中で、特別な愛を受けるべき存在。その私たちが神がほっておかれるわけがない。鳥を見て、花を見て、そのことを思い出ささいと言われる。

注意していただきたいのは、両方ともただ「見なさい」じゃない、「よく見なさい」「注意して見なさい」とあること。よく見ないと見えないから。私たちというのは、目に映っていても関心がなければ、それは目に入ってこない。私は花を育てるのが好きです。でも園芸を始めるまでは、路を歩いていても、花がどこに咲いていようが興味なかった。でも花を育て始めると町にはこんなに花があふれていたのかと気付く。完全に景色が変わった。それと同じです。鳥が飛んでいても、野の花が咲いていても、そこに何も見出さない人がいる。目に入らない人もいます。私も鳥が飛んでいるのが見えなかったことがあります。昔、牧師になる前、営業の仕事をしている時、アポイントの時間が迫っていたので必死になって町を走っていたら、向こうから飛んでくる鳩とぶつかったことがあります。なんてどんくさい鳩かと思いましたが、私も私ですね。そんなに近くまで鳩が迫ってきているのに気付かないなんて、余裕がないなあと自省した。そういう風に自分のことでいっぱいになっていると、見えないのです。空を飛ぶ鳥たちのおおらかさも、野に咲く花のかれんな美しさも。だから、それを「よく見なさい」とイエス様は言われるのですね。私たちがよく見ようとすれば、そこに神の恵みが満ちている。神の素晴らしさが満ちている。

信仰とか、宗教とかを考える時に、大事なのはこのこと。皆さんにもご経験があると思います「今まで見えなかったものが見えるようになる」「今までといっしょの景色なのに、まるで違う景色に見える」。イエス様を信じたことができた時に、私たちに起こること。別に、体が見違えるように元気になるわけでもない。奇跡的な癒しが起こるわけでもない。でも、確かに景色が変わる。自分が変わるというのは、そういうことですね。ある先生がこういうことを言っています。「よく、神がいるならば見せて欲しいものだ、とおっしゃる方がいます。特にキリスト教などのいうただ一人の神というのは、宇宙も世界も人間も包むところの大いなる方であるが、姿のない見えざる神だというものですから、よけいに、じゃまことの神がいるならば、平素は見えないにしても一回せっかくの伝道集会だからエイヤッパとここでこう見せてくれ、ということをおっしゃった方がいます。」しかし、そういう方にはまずこう問い返したいと続く。「じゃああなたには本当に神が見えますか。神を見る目があるのですか。」そのことをまず考えた方がいい、と。見えないはずです。見る心がないから。まったく同じ景色を見てたのに、町を彩る花が目に入っていなかったように。神様を見るための心が備わっていないならば、どれだけ神様がはっきりと目の前にあらわれてくださったとしたって、目に入らないのです。見よ

うと思えば、神はいつも私たちのすぐそばにおられます。神の恵みはどこにでも落ちています。それが見えないのは、私たちの目にシャッターがかかっているからです。私たちが思い悩み、思い煩いに心を完全に支配されてしまって、ガチガチにこわばってしまっていることが問題。シャッターを開けなければなりません。思い悩みという支配者に、抵抗ののろしをあげなければなりません。

とはいえ、人間とは思い悩むものです。イエス様はそのことをよーく知っておられます。だいたい前ですが、あるご婦人とこんなやりとりをした。聞けば、ご主人とケンカをしたという。老後のことや、現在の生活のことなど色々話していたら、「あんたは満足を知らん女だ」といわれたと言う。それがくやしかったというより、自分の気持ちを正確に理解してくれていないことが不満。そんなことが言いたいんじゃないのに。で、その、何か自分の胸の中でもやややしている思いをうまく口にしたいのに、自分は頭が悪いから、どうにも上手く表現できない。それが悲しい。そこで私が「結局のところ、今の生活が失われるのが怖いということではないですか」と申し上げると、「それ！！」と言う。「それぞれ、それです、それが怖くて不安なの。それを言いたかったのです」と喜んでおられる。「どうして分かるのですか？」と言われるのですが、牧師というのは人間とは何者かということを経験しながら考えている職業ですから、その人の心を縛っているものの正体は何かということぐらいは、こんな若造でも少し話を聞けばだいたい分かるわけですね。

その方の場合もしっかりしておられて、じゃあこれから先、生きていくのにどれだけの財産が必要なのか、最悪の事態まで想定しながら、すでにきっちり試算しておられるわけです。「何とかはなりそう」だと。でも「じゃあいいじゃないですか」と言ってもダメなんですね。不安はつきない。ああなったらどうしよう、こうなったらどうしようと、あれこれ考えるから。こういうものは中高年女性に特有かもしれないが、多くの人が同じような不安を抱えていると思う。備えても備えても、不安が尽きない。

それは仕方ないことです。人間である限り悩みは尽きない、これもまた聖書の示している人間理解です。子どもだって。昔たぶん小学校に入る前、縁側に座りながら、これからぼくは色々苦労して大人になっていかなきゃいけないんだなと思った記憶だけあるが、子どもながらにそういうものは感じる。小学校に入ったら友だちはできるだろうか、中学校は毎日制服を着なきゃいけない、高校受験、大学受験なんていやだ、会社に入っていよいよ働くのは辛いだろうなあ・・・そんなことを何となく縁側の記憶として覚えているが、実際みんなそういう悩みや不安と付き合いながら生きている。だからそういうことを一切不安に思わないというのは異常。でもいけないのは、そういう思い煩いに、心がかんじがらめに支配されてしまうこと。そうすると見えなくなる。神様が見えなくなる。だから「よく見なさい」と、イエス様は言われるのです。それは外に目を向けなさいということでもあります。自分の内側にばかり目を向けて、ああなったらどうしよう、こうなったらどうしようと一人でうだうだ言っていないで、外を見な

さい。そして神が、今あなたに、どんなすばらしいことを用意しておられるのかを見てみなさい。鳥を見なさい、花を見なさい。空を見なさい、山を見なさい、星を見なさい。この大いなる宇宙の運行を支配しておられる、神の御業を見なさい。天地を支えておられる唯一の神が生きておられる、生きとし生けるものの命を育む、大いなる方が生きておられる。その大いなる手の中で、小さな私が生かされている。空気を与え、水を与え、食べ物を与えて、この私の小さな命を全力で維持していただきっている。その神へと目を向けなさいと、イエス様は言われます。

ある人が言っていました、人間は一日3万回呼吸します。10万回心臓が鼓動します。その一回一回を秩序正しく適切に与えてくださっているのが神様です。心臓の鼓動を全部数えている人はいないでしょう。知らぬ間に起こっていること。でも神が全部把握していただき、私たちの呼吸を一回一回作り出してくださっている。そこに働いている力は、あの全宇宙を創造されたのと同じ力です。大いなる神の力です。神様は全力を傾けて、私の心臓の鼓動を、一回一回作り出しておられる。驚きではないですか。そう考えるなら、心臓の鼓動の一回一回を確認するのもまた大きな喜び。私たちを造られた神様、天地を創造された神様は、そうやって私たち一人一人のことをよく見ていただき、人生を支えて、いつも最善の道を備えてくださるのです。

この神様の恵みを見ようとししないで、見えない見えないと言い訳しているのが私たちです。でも私たちが神の存在に気づいていない時も、神は私たちを忘れることなく、すべての必要を満たしていただきます。

例えて言うなら、一人の不良息子がいるとしましょう。親父の言うことなんか聞けるかって家を飛び出して、あてもなく町に出て、仕事を探すけど見つからない。途方にくれて食べるものがないと悩んでいると、通りすがりのお婆さんがおにぎりをくれる。次の日には、ひょっこりおいしい話が舞い込んできて就職できる。おれはラッキーな人間だ、次から次へと道が開かれて、自分には何でもできるんじゃないかとうぬぼれあがってしまう。でもなんのことはない、それは全部裏で父親が手を回して、バカ息子のために用意していたこと。息子は思い上がって一人で生きていると思っているが、ずっと陰ながら支えてくれていた父がいた。神様のしてくださっていることというのはそういう風に例えられるかもしれません。神は、確かに生きておられて、すべて必要なものを満たしていただき、そんな親不孝な私たちを、ずっと黙って支えてくださっているのです。

そんな神様が、今やついに口を開いて、その目を開けなさいと言っておられるのです。もうこれ以上、思い悩みに縛られてはいけなく、これ以上惨めになってはいけなく。目を開けなさい、私はここにいる。私の胸元に飛び込んで来なさいと言っておられます。バカ息子ですから借金もたくさん作ってしまった。でもその借金返済のために、一番大事な宝物を犠牲にするから、だから帰ってこいと言っておられる。その犠牲にされた宝物こそがイエス様です。イエス様の十字架の死は、私たちの罪の身代わりです。神の大切な大切な独り息子であるイエス・

キリストの命が、私たちの借金返済のためにささげられたのです。それほどまでに神は私たちを愛しておられます。

この神の思いに応じて、神のもとに立ち返ること、それが神の国と神の義を求めるということです。31節から「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。それだけに集中しなさい。他の事は考えなくていい。それは言い換えるなら、イエス様の十字架において示された神の愛で、自分の心をイッパイにするということです。ヨハネの手紙Ⅰ 4：9，10「9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」この愛で心をイッパイにすることです。神は私のことを絶対に愛しておられる。私以上に私を知っていてくださる方、私に何が必要かを願う前から知っていてくださる方が、私のために必ず最もよいものを備えてくださる、そのことで心をいっぱいにして、余計なことを考えない。常にそこから世界を見るのです。

神の愛に満ちているものとして、この世界を見る、目の前にある現実を見るのです。それが神の国と神の義を求めるといふことの私なりの理解です。そうすれば、あらゆる必要は満たされます。これは本当です。というよりも、あらゆる必要といいますが、本当に満たされなければならない必要というのは、そんなに多くないのです。私たちにとって本当に満たされなければならない必要は、自分を変えていただくということだけです。神の恵みが見える者に、神の愛を信じる者にさせていただくことだけです。この必要が満たされるなら、どれだけ現実に苦悩が多くても、もう私たちは思い煩いに心を支配されたままではいません。

カトリックイエズス会の優れた霊的指導者であったインド人のデ・メロという神父がこういう言葉を残しています。「私の態度のほかに、変わったものは何も無かった。それだからこそ、すべてが変わったのだ。」すべてが変わる。見ているものはこれまでと一緒なのに、今までと全然違う景色に見える。神の愛に満ちている世界が見えるようになる。それは昨日まで見えなかった景色かもしれません。でも今私たちには見えるはずですよ。どうぞ皆さん、今日からの一週間、新しい景色を楽しみながら、目を大きく開いて歩んでください。